

「妊婦健診を自宅でオンラインで受けられたので、（外出による）コロナ感染や、車を運転するリスクを心配せずに済んだ。分娩施設から遠い場所に住む妊婦にとってのメリットは大きい」。昨年7月に第1子を出産した後志管内俱知安町の滝村和美さん（38）は、新型コロナウイルスが流行する中で受けた遠隔健診を行う評価する。

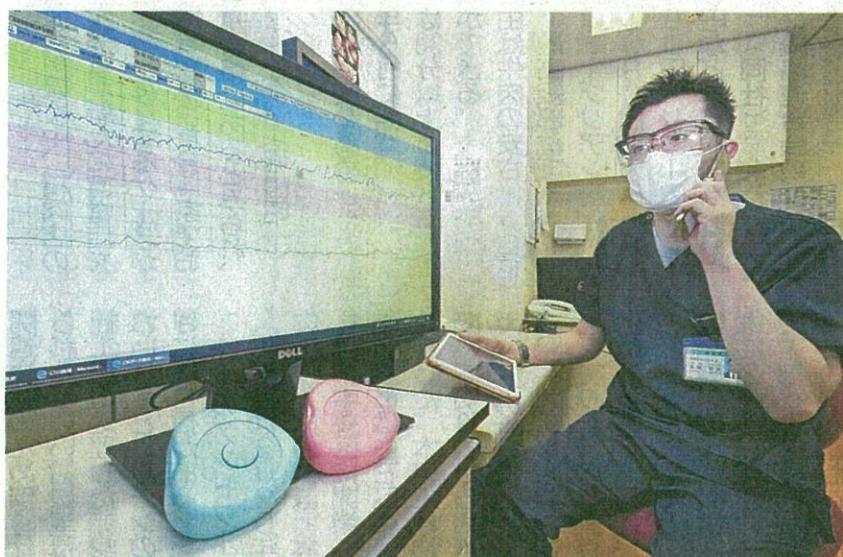
オ・パラリンピックに出場した車いす陸上選手。15年前に脊髄梗塞を発症し、下半身にまひが残る。陣痛の感覚を自覚しにくことなどから、ハリリスクのお産となる可能性が高く、地元の俱知安厚生病院から北大病院を紹介された。だが、札幌までは車で片道2時間以上かかる上、人混みによる感染への不安も大きかつた。

コロナ下で、医療機関に直接足を運ばずとも、インターネットを使い、妊婦健診を遠隔で受けられるシステムの活用が全国的に広がりつつある。妊婦の通院回数を減らし、感染リスクを低減させるためだ。道内では、いち早く北大病院が20年3月、緊急的な措置として遠隔健診を開始し

手のひらサイズの遠隔分娩監視装置「iCTG」を導入。貸与された妊婦が、自宅でおなかにハート形の器具を装着すると、胎児の心拍数や、おなかの張り具合が自動で計測される。ネット経由で送られたデータを医師が確認し、妊婦はスマートフォンなどの画面越しに診察を受ける。

コロナが変えた暮らしの姿

第6部 「産む」の現場から



手元のタブレットで胎児の心拍数を確認しながら、コロナ感染病棟にいる妊婦と遠隔で会話する小樽協会病院の黒田敬史医師。手前のハート形の機器が分娩監視装置 iCTG
(打田達也撮影、写真の一部を加工しています)

「赤ちゃんは元気だよ。丈夫、心配ないからね」。小樽協会病院産婦人科の黒田敬史医師(42)は、ICTGを通じて手元のタブレットに映し出された胎児の心拍数のグラフを確認しながら、コロナ感染症棟にいる妊婦に電話で伝えた。妊婦側は機器のスピーカー

の接触を最小限に減らしながら母胎の管理ができる。離れていても赤ちゃんの元気な様子がタイムリーに分かるのは、妊婦にも医療者にも有益」と話す。

週以降の約1ヶ月間、このシステムを使って週2回の遠隔健診を受けた。「離れていても医師と頻繁に顔を合わせて相談ができたので、安心感があった」。その後、予定通り36週で入院し、2週間後に帝王切開で出産した。

カーラー、トク、トク」という心音を聞くことができる。

通院減らし感染も予防

「つながった」と好評だった。

東京報道の根岸寛子が担当しました。

コロナ下で妊娠や出産の現場がどう変わったか、当事者らの声を集めたインターねつトアンケート特集を、「番外編」として、17日くらし面に掲載します。